

荒尾精と愛知大学 —荒尾精没後 120 周年に寄せて—

愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー 藤田 佳久
(2016 年 10 月 29 日 全生庵)

ごあいさつ

今回、荒尾先生が亡くなってから 120 周年目だということで、この墓参の時に「荒尾精と愛知大学」というタイトルでお話をいただけないかと卒業生の中島寛司さんから急に依頼をうけましたので、愛知大学と荒尾精及びその関係をどういうふうに見るかをまとめてみました。お隣に大御所の村上武さんもおられるので、よろしくお願ひしたいと思います。今日、荒尾精の考えが愛知大学にどのようななかたちで継承されているかということを中心にお話をさせていただきます。

1. 荒尾精の清国への関心

ご存じのように荒尾先生は 1859 年、江戸時代の終わり、名古屋藩士の士族の長男として生まれました。明治維新になって武士は失業しますから、荒尾家も家族で上京をして荒物屋を東京でやるのですが、武士の商法で失敗してしまいます。その時、荒尾精は近くの麴町の警察署長、この方は後に栃木県知事になった方ですけど、その方の書生さんとして才能を見込まれたのです。明治維新の直後は朝鮮問題がクローズアップされていました。朝鮮側が貿易をなかなか認可してくれないということで朝鮮問題となります。しかし背景には清国が朝鮮をサポートしているというわけで清問題、初めて国際問題に触れたのです。その後、当時の学校制度で言うと一般の学校そのものの制度がまだ未熟でしたから、陸軍の共同学校へ入って出来たばかりの陸軍大学へ進学します。そこで根津一と知り合うわけですね。根津先生のほうが 1 年歳が上なのです。

その後、色々あったのですが熊本へ派遣されます。ここで清国から帰ってきたばかりの御旗雅文という方ですが、この方から清国情報とか清国語、今でいう中国語を勉強するチャンスを与えられます。しかもその話から清国に更に関心を持ったと。荒尾精は体格がいい方で、熊本の方々は非常に礼儀正しいというところもあったりして今西郷だと称されました。

その後、1886 年に行きたかった清国、特に上海へようやく行けるようになって、そこで岸田吟香と出会います。この方は最初の日本人の国際貿易商人というふうにいわれています。横浜でヘボンに目を治してもらって、その時に才能を見込まれて今流に言うと日英、英日の辞典、辞書を作るのに言葉をたくさん知っているということでヘボンのサポートをします。その目薬の作り方も自然に覚えたために、日本へ戻ってきてからもまた上海へ行き、楽善堂という店を構えて利益をあげたりしますね。岸田吟香の日記を見ますと「東洋先生」っていわれて随分上海の人からは敬意を表されておられたようです。

荒尾はその彼を頼って上海へ行き、そこでも非常にドラマチックな歴史がこの間あった

のですけども、彼の信用を得て漢口に楽善堂という支店を作ってもらい、薬と本屋さんをやったのですね。その時に西南戦争で敗れた若者たちとか会津での戦いで敗れた東北の人たちの若者が日本では芽がないというわけで大陸に行った。いわゆる後に大陸浪人といわれる人たちですけれど。そういう人たちを集めて漢口楽善堂といいますか、堂員というかたちで現地調査をやらせて、これが現地調査の最初と思うのですね。多くの資料を集めて帰国します。

しかし初めての試みの中で多くの堂員を失うわけです。行方不明になったり死んだりしてですね。そういうわけできちんとした学校が必要だと 1890 年に日清貿易研究所という学校を上海に開設します。これは中国との経験で貿易をきちんとやることによって日本と清国が提携して列強に対抗できるのじゃないかという発想があったわけですね。それを実現するためにこういう研究所をつくったのです。

2. 荒尾精の博多での講演

1889 年に博多で生徒募集を行う演説記録が残っているのです。ここ 2、3 日前からを読み込んだのですが、なかなか細かな内容がたくさんありますね。

福岡県の修猷館中学校、今の修猷館高校や博多商業で行っています。修猷館は学生 600 人を集めて演説をし、博多商業では 60 人集めたわけで、そこでどんな演説をしたかと言うと、学徒のために日本が置かれた立場、これは先進諸国と比べても農業から商工業を振興する必要があると。これが今後の日本に非常に重要だということを伝えるわけですね。その時に商工業の振興には欧米というよりは隣の清国を相手にするのが一番早いのだと。そういう中から先ほど言いましたような列強を意識した日清提携論みたいなのをいうわけですね。しかしながら、従来、試みとして日本人が支那の貿易をやった時に利益をあげた人はいなかったと。何故か。三つ挙げたわけです。一つが、支那の商人と競争するだけの資格がなかった。それだけのきちんとしたベースを持っていないと。二番目は日本商人は目先の利益に走ってしまって公益を顧みないし、安売りをしてしまう。したがって物価を下げてしまったりして、混乱を起こすだけの弊害が目立ったと。三番目は、そこで以上を克服するためには日本の商人になるための人材教育、実地教育が必要であると。つまり、商業学校の設立が必要だというわけで、そのための日清貿易研究所というのを作ったわけですね。そして 2 年半ぐらいの中国での経験の中で清国人、つまり中国人とのつきあい方や彼らの特性をいくつか述べているのですが、その中で清国の商人は先をちゃんと読んでやる。商売の前半と後半に 1 年間分かれますけど前半は後半のためにやるというような、日本人のように目先で追いかけるのではなくて先を見たかたちで商売をやる。表向きは非常にサービス精神があったとしても内面は違うことを考えている。そこで表面だけで解釈するという事は間違いだと注意を喚起しています。ただし、信用を得るとつき合いは長くなります。どういふふうに信用を得るか。そういう上で清国と向き合うべきであると。後に色々な本を書きまわすけれども、こういう現地の経験がベースになっています。

その結果、たくさんの人を集めた演説の中で地元の生徒がかなり応募するのですね。それをぜひ県の費用でできないかというような構想を持つわけです。それが後に県費制度になっていくわけです。

それからもう一つは商品陳列所を設けて実際に実習しなくては駄目だと。慣例的なこと

だけでは駄目だということでトレーニングをして、有能な卒業生を生み出すわけです。

3. 対清意見と反論

帰国してから漢口で集めた膨大な資料を根津一に編集させて『清国通商総覧』全3巻、約2,000ページを出版します。これは今まで日本人は清国を漢詩、漢文でしか知らなくて、素晴らしい世界だというイメージを持っていたのですが、ある意味ではそれをぶち壊したと言いますか、現実の清国を伝えたわけで、多くの人たちがこれを読んでベストセラーになったと。しかもこれで日清貿易研究所という名前を高めたというわけですね。

その直後、日清戦争が起こります。その際に荒尾精が『対清意見』というのを書いて提出します。ここで何を言ったかという、日清戦争というのは数十年先のアジアの自立の第一歩にすぎないと。だから目の前の日清戦争で日本が夢中になってしまっていて、そこで利益をあげるなんてことを考えたら駄目だというわけですね。そういう主張をしたのですけれど、戦いで戦況が有利になっていくと世論が変わっていってしまう。世論も最終的には戦争に勝ったということで、賠償をいかに取るか夢中になってしまったと。しかし、それをやると、将来を見据えた第一歩としての清国との関係が悪くなってしまおうというわけで、そこで賠償金を取らないよう意見を述べるわけです。するとそれに対して荒尾批判が起こったり、疑問も呈された。しかも非常に親しい一緒にやっていたと思っていた方々からも批判を受けたというのが非常にショックだったと思うのですね。

そこで荒尾は京都に隠棲をして、その批判に対して何故自分はこういう提案書を出したのかということを一生懸命書いたのですね。その中で王道と言いますか、のちにアジア主義につながると思いますか、そういう意識を持ちました。しかも有能な卒業生をたくさん戦争で失ってしまったのですね。通訳従軍した人たちが多かったのですが当時は中国語ができる若者がいませんでしたから、日清貿易研究所でビジネスマン養成をしたあとに戦争に取られてしまった。一方では白岩竜平のような非常に優れた企業家も生み出したわけですが。どちらにしても日清貿易研究所の存在感というのはあったのです。

4. 荒尾精の死と主張

1896年、悲劇が起こります。荒尾は台湾とその南部、更に南洋の方と提携すべきだというわけで、日本の植民地になったばかりの台湾で現地との交流を色々し始めた直後、ペストに感染して亡くなってしまったのです。この年から今年で120年目というわけです。

荒尾精の構想というのを簡単にまとめるのはなかなか難しいところがあるのですが、大きく私が取りまとめたのは、日本の産業構造を転換しなくては行けない。先ほど言いましたように商工業というのを育てないと世界が国家にはなれないだろうと。そのための人材養成の必要性、これが後に東亜同文書院へ発展していくわけです。そのすぐ下に書きましたように清国、更には東南アジアとの提携、欧米への意識があって、そういう意味から言いますと、現在から言うところの考えはグローバルな意識で世界を考えた視点でしたし、そこで人材を育成するということは国際的な人材養成を目指したといえると思います。これは当時の日本にあって非常に先駆的で画期的な構想ではなかったのかなと思います。

亡くなった後、六番目ですけど、根津一が実質的な東亜同文書院の院長として長い間務めて、書院の神様のようになるわけですが、ここでは人材育成のための徹底として中国語、

英語、商業制度を実地調査する。最初の頃の卒業生の人たちは皆これでトレーニングを受けて『清国経済全書』全12巻という、2万ページの原稿の中から1万ページを活字にしたのですね。これは凄い作品になるのですけれど。こういう調査を行いました。

次に貿易品、商品調査ということで大調査旅行が行われました。こういう荒尾精の構想が具体化していった段階ですね。

しかももう一つ、右に書きました④のところで、根津院長の発想の中に、今で言うと資本主義ですけれど、資本主義をそのままやってはよくないと。倫理観がある人材育成、徳のあるビジネスマンになれというわけで根津先生は全学生に対して倫理の教育を行いました。中国の古典が中心です。これはヨーロッパのマックス・ヴェーバーが書いた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本と同じです。これも資本主義を荒っぽいかたちでやるのではなくて、プロテスタンティズムの徳育をベースにしてやるべきだということを書いたわけですが、そういう点で言いますと、根津院長の発想はやはりその日本版というかアジア版と言いますか、きちんと押さえるところは押さえていました。そこがまた書院が他とは違う点なのです。

5. 東亜同文書院の大学への昇格と本間先生、そして呉羽分校の役割

東亜同文書院が大学昇格になります。本間先生が赴任してきます。本間先生が目指したのはアカデミックな教育、研究で、それを加えるという必要があると。また、ご本人が話されていますが、荒尾、根津精神を継承するのだということを盛んに言われたわけです。そしていよいよ戦況が悪化してきた時に上海にいましたから、日本が戦争に負けるだろうということは分かったというわけで、その敗戦の年の前年ぐらいから計画を練って呉羽に東亜同文書院の分校を作ります。最後の学年は上海への潜水艦攻撃で渡れませんでしたから、内地で校舎を作ると。それだけではなくて次の橋渡しを考えていたと思うのです。この呉羽校舎への教員数は、最初23人の予定だったのですけれど、結局軍部と上海居留民団の人たちの反対によって半減して13人で校舎をオープンせざるを得なかったのです。しかし敗戦によってこの呉羽の先生たち13人は協議会を繰り返し開いて、その中で敗戦後の我々はどういう大学を作るべきかということを一生涯懸念検討したのですね。それが次の2枚目です。この右の下のところは長方形でくくった部分があります。呉羽分校と書いてあります。ここの分校長が齋伯守先生です。教授に太田英一先生、神谷龍男先生や、その他の方々がいました。活発な議論をしてどういう大学を作るべきかということを議論し、まとめていったのですね。そこにありますように、真ん中ぐらいのあたりですが、新教育方針として科学精神を堅持して時局への反省。これまでを反省しながら中国への正しい関心を養成する。文化国家と平和国家を日本は目指すべきだと。カリキュラムも再編成して実地研究を大調査旅行をベースとして研究を重視する。書院の中国研究というのは実質的にトップのレベルであったが、これをいかに評価していくか。それともう一つは本学の新しい形の方針としては、書院で学業半ばで学徒動員によって勉強機会を失った。そういう学生のためにも彼らを受け入れる学校を早急に作るべきだと。それと復員の学生、他の学校の学生についてもそうです。しかし戦後、文部省が愛知大学を作ってから他の大学の引揚げ学生も入れるという方針もあり、愛知大学に沢山の学生が集まってくるわけです。しかもその上で書院の伝統をどういうふうに継承するかという時に、一番目、軍隊学校、書院はスパイ学校だとイデオロギスト

たちから戦後いわれたのですが、これはあくまで風評にすぎない。書院の中国研究は中国人をしっかりと認めているし、本学の使命は日中協調の使命にあると。共同でという使命ですね。というようなかたちで議論がずっと進んで、太田先生がそれをずっとまとめておられたのですね。

終戦のあくる年、東亜同文書院の先生たち、特に本間先生たち本隊が5月に帰って来て、10月には文部省に大学設置を申請して通すわけですけれども。これが普通であったらとも考えられないスピードです。本間先生も上海での中華民国への引き渡し書類の問題とか引き揚げの時の問題とかの忙しい中、次の構想、つまり、書院をベースにもう一回きちんと継続するというかたちの新しい学校を作るという大きな筋をつくっていたのでしょね。その申請内容はこの呉羽分校の太田先生たちが中心になって、この右の枠の中で示したような構想でもって基本はすでにもう出来上がっていた。だから文部省へ申請する時には比較的スムーズにいった。一緒にの時期に申請した東海大学とか玉川大学は落ちてしまっています。愛知大学だけ申請が認められた。本間先生がつくられた呉羽分校というものがあつたがためにそこで自由に議論できるような一種の協議会、シンクタンクですかね。それが戦後の時代を作り出したということがいえるのではないかということです。

6. 愛知大学の誕生と本間先生

一番最後の八番目、1946年、昭和21年に愛知大学ができる。GHQの施政下で東亜同文書院大学の名前を使えませんでしたけど。その時の設立趣意書が国際人の養成と地域社会への貢献。こういうようなことを唱えた大学は他にないし、考えられないのです。その下に現代のグローバルな視点とかグローバルな人材育成というものが考えられる。その右のほうに地域社会への貢献、6大都市以外で初めての旧制大学を豊橋に作った。地域社会の貢献は、ある種のフィールドワークがベースにある発想だと思うのですね。そういうわけで今日の愛知大学を見ますとその後、こういう支柱を満たしながら各学部、学科、専攻の中に中国関連の専攻が各学部置かれたのですね。たとえば、学部であれば東洋史とか中国文学、東洋哲学という専攻が置かれたわけですね。法経学部では中国経済、中国法政などです。そういう中で中国との勉強ができた。のちに大学院中国研究科ができたり、現代中国学部、それから国際コミュニケーション学部ができたり、国際中国学研究センター（ICCS）や東亜同文書院大学記念センターでの研究プロジェクト、グローバルな人材プロジェクトなど、文科省の助成をもらってやるようなプロジェクトもつづきます。下へ太い線を引いたのですけれど、左の上のほうの太い線も含めて、そういう点で荒尾精の考えた構想というものが、こういったかたちで今の愛知大学の中に受け継がれていると見ていいのではないかということです。

そして一番最後の3枚目ですけれど、これは本間先生が亡くなった時の、当時の浜田学長が本間先生のお葬式の時に読んだ文書の中でそれぞれ非常に重要なことおっしゃっておられます。そして一番下の②です。これは本間先生のご実家の小池さん。本間先生は、ご実家の名前は小池さんといわれてご養子さんだったのです。そこで実家へ当時、愛知大学を作ってるプロセスを細かく書き送っている。本間先生への手紙は結構あるのです。この夏休みもその養父の方のお宅から膨大な書簡がほこりだらけで見つかつて、その中に本間先生が書かれたものも50から80通ぐらいありました。それを山形までほこりをはらいに行って、

まだ読むのはこれからですけど今後の楽しみな仕事です。この手紙のちょうど真ん中ぐらいに、農学部とか水産学部を設置したいと書いてあります。前半のほうでも書院をベースにしながら愛知大学をつくっていったというようなことが書かれておられます。そういうことも踏まえてみると、荒尾先生の構想が色々な人々を通じて、今日の愛知大学に生きているといえます。勿論新しい場面も色々入ったりしているわけですが、そのエッセンスだけ見て引き出していきますとこんなかたちで「本間喜一論」を論じられるかなということ。「今我々が一生懸命こうやってできるのも先生のおかげです。」と報告しながら今日お墓をお参りしました。

短いお話をさせていただきました。新しい意見がございましたらどうぞお願い致します。とくに村上さんは最近荒尾精についての新しい本も出されて毎日新聞で紹介されております。

【質疑応答】

村上 私が付加えるのもないのですが、『対清意見』と『対清弁妄』についても、『対清意見』は全くこれとそっくりそのままのものを明治の時代、荒尾先生がつくって発行しておられるわけです。ところが『対清弁妄』のほうも新聞に書きたいと。これに対する期待は、その当時非常に高かったと思うのです。中国に対する知識では荒尾先生の右に出るものは日本人にはいないだろうというような評判でしたから、非常に期待されていた。しかし、書かれている内容は賠償なんかを取るべきではないというようなことで、国民やあるいは軍人もそうですけれども皆が期待していたものと全く逆のことが書かれていた。そこで、荒尾先生の周辺の方々から非情な批判が出たのだらうと思います。ですから荒尾先生はこれを出した途端にまた東京を引き払って根津先生がおられた京都へ引きこもって、身を隠されたのですけれども。それでもそこへなおかつ手紙や何かで色々な批判が届くのです。そこでこれはどうしてももう一つ書かなければということで書いたのがこの『対清弁妄』なんです。ですから『対清意見』は、こうなければならないのだということ荒尾先生が落ち着いて書いておられるという様子が見取れるのですが。この『対清弁妄』のほうには何でお前たちは分からないんだというようなことが非常に厳しい口調で書かれております。そういうことがあって、今も藤田先生にお話しいただいたのですが、荒尾先生は、結局三国干渉を予見しておられたわけです。それが実際に三国干渉を受けて、その後の日本は中国との関係をどうすべきかということで、目を付けられたのが日本の領土になった台湾をどのように扱うのかということであったのだらうと思います。それで台湾へ渡られて、そこからまた中国大陸のほうへも色々な関係を広げていかれるという構想があったと思います。その途中でペストにかかって亡くなられたということです。荒尾先生のことについて書かれているのは『巨人荒尾精』で、これは井上先生が書かれたものをそのまま復刻させてもらいました。ここに書いてある字はお亡くなりになった近衛通隆先生に書いていただいたものですが、もとの本は古い字で書かれております。これは井上さんの書かれたものをそっくりそのまま復刻しまして、これは『対清弁妄』と『対清意見』の他に『対清通商意見第一』とかいうのがあります。これについては私も若干、荒尾先生の略歴なんかを付け加えさせていただいたものを作りました。これは500部しか作っていないので、もうどこにも無いのです。そうしましたら、こ

れを書肆心水という出版社が出版してくれることとなりました。内容は前と同じものですが、これを新しい活字に全部直して、私の書いた解説を付け加えていただけてもらったのです。これもあまり数を印刷してないと思いますし、あまり出てないようすけれども。毎日新聞で紹介していただきました。

藤田 書の文体は昔の表現ですけれども、読ましていただいたら、荒尾先生は最初2年半ぐらい清国におられた時の経験をふまえながら、先を見据えていて、清国は今では眠ってこんな国だけれども一旦まとまれば過去の歴史が分かるような大国になるだろうと。その時は今の中国と同じですけれど周囲にぐわっと進出するはずだということを書いています。その時に日本はどうするのかというと、上手くそれを制御しながらどういうふうにも共同でやっていくかということを考えていかないといけない、というようなことまで書いてあるのですね。この中に清国をどう見るかみたいな話もあり、それらいっぱい煮詰まっていた今の中国を知る上でもの凄いに立ちますね。凄い人だなと思い、非常に興味したのです。

中島 ありがとうございます。藤田先生も新しい色々な資料を作っていただいたうえで、非常に内容の濃いお話をいただきました。ありがとうございます。村上さんから補足をさせていただいてありがとうございました。感謝の気持ちを込めて。

村上 こちら全生庵へお預けしてある荒尾先生のお位牌を出してきていただいて、ここへ飾らしていただいたのですが、これは元々が根津先生の京都のお宅にあった荒尾先生のお位牌です。それで私のところで根津先生のお位牌と奥様とマコトさんのお位牌は、甲府の根津家へお返ししたのです。けれども、これは根津家にお返しするというよりもこちらのお墓のあるここで引き取っていただくのがいいのではないだろうか、ということでもう一度お願いをしてこちらでお位牌は預らせていただいているわけです。ご覧になって分かるように荒尾先生のお位牌は非常に小さいですね。お名前をそのまま根津先生と書かれておられます。

質問者 ここのお寺さんと荒尾先生のお墓、この関係は誰がつなげたのですか。

村上 分かりませんがね。

質問者 入口にある山田良政の碑、このお寺とのどういう関係があるのですか。

村上 どうなんでしょうね。

小崎 今後どういうことがありますか分かりませんが、このお寺でこういうことも続きますか？

中島 続けます。

小崎 続けていただきたいと思います。それから京都のほうでも、もし続くならば続けていただきたいのですが。どうですか？

中島 やっていきます。

小崎 京都は京都で大きなお墓みたいなものがあります。またその時お知らせ願いたいと思います。我々はいずれにしてもそんなに長く生きられるわけではないのですが、私も一生懸命生きとるのですけど、いつまで生きられるか分からず、とにかくこういう姿になっても頑張っております。ひとつよろしく皆さんお願い致します。今日はありがとうございました。

中島 今の小崎さんの話で来年も続けますかというようなことで、私は続けますと言いま

したけど、そのバックは霞山会の皆さんが応援してくれるということを一言付け加えたいと思います。それから滬友会事務局の最後の色々な引き継ぎをしたのは関谷さんです。そこら辺りひとつ霞山会の皆さんももし疑問がありましたら、引き継ぎの事情については関谷さんが人柄上言いたいことを控えておられますので、その点を含んでお話の機会があれば伺ってほしいと思います。掃除のほうも霞山会のほうで色々と面倒を見ていただいているということですから、ひとつよろしくお願ひしたいと思います。

小川 今年の6月、三重県の宇治山田で神宮皇學館大学の寮歌祭がありました。その時に小崎さんをご参加なさいまして、同文書院の代表として歌う順番がきたわけです。小崎さんが「東亜同文書院の出身です。私は大正11年生まれ、とにかく現在94歳です」。その次に出た言葉が非常に感動的でした。どういう言葉か。「私は94歳ですがもっと長く生きたいんです」。これは普通でしたらもう94にもなって云々、という話ですがこの時の小崎さんの口から出た「94歳でもっと長く生きたいんです」。この迫力は当日60数人参加しておりましたけれど、小崎さんがもちろん最年長です。とにかくそこにいた皆さんが大体85歳とか90近くの人ばかりの中で堂々とそうおっしゃったことは、私は非常に感動しました。周りもしーんとして聞いておりました。あの迫力は小崎さんが長生きする証拠だと思います。100歳まで是非。

小崎 ありがとうございます。

小川 感動的でしたよ。本当に。

中島 関谷さん、今日の感動を一言何かありますか。

関谷 いや、どうもありがとうございました。

中島 書院と愛知大学の関係ですが、今年11月2日には滬友ゴルフがあります。春名さんの関係で芙蓉カントリーでやります。それでは、これで締めたいと思います。今日はありがとうございました。